

重紐をめぐる幾つかの問題(8)  
—類相関を利用した音価の推定について—

吉池孝一・中村雅之

## 1. はじめに

吉池：今回は舌音の帰属について議論し、これまでとはやや異なる考えを提示しました。

中村：舌音をB類として韻書を作成したグループと、A類として韻書を作成したグループがあった。切韻の編纂者や改訂者は舌音をA類とする立場だったため、分韻において舌音をA類の側に入れただけでなく、反切においても3割ほどがA類音節の反切下字に用いられたということです。

吉池：切韻においてこのような反切の混在を可能にしたのは何かということも話題に上りました。反切の適否の確認において、時に上字の介音を採用するという反切の口唱法によって雑多な反切を理解したということですね。この口唱法は中村雅之(1992)<sup>1</sup>で提示されたものです。

中村：別の言い方をすると、切韻に存在する雑多な反切の適否の“確認”において、時に上字の介音、時に下字の介音を選択するという柔軟な口唱法の採用によって、特徴の異なる複数の底本の反切の混在を認めたという事です。そのように考えなければ、同じ反切下字がA類音節にもB類音節にも用いられるという現象は理解できません。

吉池：今回は重紐・類相関の議論の締め括りとして、類相関を中古音の音価推定に利用した論文を読んでみようということでした。何を読みましょうか。

中村：平山久雄(1966)<sup>2</sup>はいかがでしょう。

## 2. 平山久雄(1966)を読む

---

<sup>1</sup> 中村雅之(1992)「中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって」『富山大学人文学部紀要』18、89-104頁。『中古音のはなし—概説と論考』所収、古代文字資料館、2007。

<sup>2</sup> 平山久雄(1966)「切韻における蒸職韻と之韻の音価」『東洋学報』49-1。

吉池：平山久雄(1966)は「一 唇音拗音における反切上字—帰字の類相関」において、周法高(1952)<sup>3</sup>をまとめ議論の足掛かりとします。

まず、唇音拗音音節を重紐A類・B類（重唇音）とC類（軽唇音）の三種に分け次のように三種の主母音を紹介します。

A類主母音 e, ě

B類主母音 ɛ, ě

C類主母音 ɐ, ə, o, u

次いで、「A類反切にB類上字は使われず、B類反切にA類上字は使われていない。これに対しC類上字は、A・B・C各類の反切に使われている。A類上字の中「匹」（質韻滂母）だけは例外であり、C類上字と同じく各類の反切に使われている。」と周氏論文を要約します。この要約に従って、周法高(1952)が発見した唇音音節の帰字（被切字）と反切上字の関係を、表1としてまとめて、平山氏はこれを“類相関”と命名しました。表1は唇音音節のみに限った類相関です。なお表1には、C類帰字（被切字）の上字にA類字とB類字は使われないという現象が見えます。これは平山氏によって付け加えられたものです。

表1

帰字 上字	A	B	C
A (除「匹」)	○	×	×
B	×	○	×
C	○	○	○
「匹」	○	○	○

### 主母音

吉池：A類・B類・C類の帰字（被切字）と反切の上字との間に見られる表1の類相関の現象を利用して、蒸職韻がA類・B類・C類のいずれであるかを決し、主母音の音価を推定するというのが平山久雄(1966)の主旨です。重紐をどのように考えるかによって、拗介音と主母音を含めた韻母のあり方も異なってくるので、先ずその点を確認しておきましょう。

中村：重紐を主母音の違いとする周氏の説、介音の違いとする有坂・河野氏の説、音韻的に声母の口蓋化の有無の違いとする平山氏の説（三根谷氏による）により、その介音と主母音を比べてみましょう。

<sup>3</sup> 周法高(1952)「三等韻重唇音反切上字研究」『中央研究院歴史語言研究所集刊』第二十三本下、385-407頁。

吉池：周氏は重紐の区別を主母音の区別と考えて、A類をやや閉じた e, ě, B類をやや開いた ε, ě として区別し、介音は-*j*-の一種類のみとします。いま周氏の考えに沿って拗介音と主母音を表示すると次のとおりです。

- A類音節の介音+主母音 -*je*, -*jě*
- B類音節の介音+主母音 -*iε*, -*iě*
- C類音節の介音+主母音 -*iε*, -*iə*, -*iɔ*, -*iɯ*

中村：有坂氏と河野氏は重紐の区別を二種の拗介音の違いと考えて、A類の介音をやや閉じた-*j*-とし、B類の介音をやや緩んだ-*i*-として区別します。いま、A・B類の主母音をどちらも e, ě として、介音+主母音を提示すると次のとおりです。

- A類音節の介音+主母音 -*je*, -*jě*
- B類音節の介音+主母音 -*iε*, -*iě*
- C類音節の介音+主母音 -*iε*, -*iə*, -*iɔ*, -*iɯ*

吉池：平山氏は、三根谷徹氏の重紐の音韻論的解釈に従い<sup>4</sup>、重紐の区別を声母の口蓋化の有無の区別とし、A類音節声母に口蓋化要素/*j*/を設定します。C類音節の声母については、A・B類の中間的ニュアンスとしますが、中間的とはなにか、その実体を特定するのは難しく、いま仮に(*j*)で示すことにします。拗介音は一種類で/*i*/です。平山氏は、介音と主母音を三根谷氏にしたがい-*i*-、A・B類/*a*, *e*/、C類/*a*, *ɰ*/とするので、いまそれに依り表示すると次のとおりです。

- A類音節の介音+主母音 *j*-*ia*, *j*-*ie*
- B類音節の介音+主母音 -*ia*, -*ie*
- C類音節の介音+主母音 (*j*)-*ia*, (*j*)-*iɰ*

中村：このようなA類音節、B類音節、C類音節が前掲表1の“類相関”を成しているわけですが、表1の類相関は、重紐の違いを主母音の違いと見ても、介音の違いとみても、平山氏のように声母の口蓋化の有無の違いと見ても成り立つはずですが、そもそも類相関という現象は何故起こるのかについて平山氏の考えを確認しましょう。

### 類相関が成り立つ理由

吉池：平山氏は、なぜ類相関が成り立つのか、その理由について議論します。A類の声母は口蓋化しており、B類の声母は口蓋化しておらず、音声的な異なりが大きかったため、互いに上字となる事が無かった。C類は音声的に両者の中間であったためA類の上字にもB類

---

<sup>4</sup> 平山氏は注10において「重紐の音韻論的解釈の問題はなお考えたいが、しばらく三根谷氏に従おう。」(63頁)とします。

の上字にも使用されたとします。この議論によって、「蒸職韻唇音が反切上B類の特性を示すのは、声母がB類の音声的特徴を有したために外ならない。」(45頁)としますが、口蓋化の有無と結び付けるこの議論には違和感があります。

中村：「声母がB類の音声的特徴を有したために外ならない。」として、類相関という現象と上字の声母の口蓋化の有無とを結び付けますが、この点については確かに違和感があります。もっとも、平山氏の立場から言えば、重紐の別を声母の口蓋化の有無とするので、その点では一貫しているのですが。

吉池：C類が音声的に中間であったという平山氏の説を仮に認めると、C類帰字(被切字)の上字にA類とB類が使用されても良いはずですが、表1によると、そのようにはなっていません。

中村：平山氏は注20で、そのことについて自身の考えを述べます。反切上字選択において二つの志向の存在を指摘します。

一つ目、帰字の音韻的条件に関わりなく少数の一定の上字を選択する志向。

二つ目、帰字と音韻的構成が一致するよう上字を選ぶことによって反切を唱え易くする志向。

C類上字を選ぶのは前者によるもので、A類及びB類上字を選ぶのは後者によるものとします。遇撰の字は上字として頻用されますが、それは一つ目の志向によるということでしょう。

吉池：そこまでは良いのですが、結論として「C類反切にA類上字・B類上字の用いられる余地のないことが了解されよう。」(65頁)とします。「余地がない」とは議論の飛躍のように見えますが、私の誤解でしょうか。

中村：平山氏の言わんとする所は、二つの志向に忠実に従った場合、C類反切は一つ目の志向によっても、二つ目の志向によってもC類上字を選択することになるので、理論的にはC類反切にA類上字やB類上字を用いる可能性がないということなのでしょう。二つ目の志向は、慧琳音義のような反切の作り方と関係がありそうです。被切字と音韻的構成が一致するよう上字を選ぶということであるならば、周氏のように重紐を主母音の違いとしても、有坂・河野説のように介音の違いとしても、類相関の現象は起こり得ます。声母の口蓋化の有無に依らなければ説明できないというものではありません。

吉池：C類帰字（被切字）の上字にC類が来てA類・B類は来ません。C類帰字（被切字）とA類・B類は音韻的構成（特に主母音）が異なるので、上字にA類・B類が使用されないのは理解できます。

そのうえで気を付けなければならないのは、C類音節の反切上字には二種類あるということです。二つ目の志向による「帰字と音韻的構成が一致する」C類と、一つ目の志向による「少数の一定の」（=汎用的な）C類です。この二種が混じっているはずなので、類相関を理解する上で注意が必要です。

中村：重紐の区別が声母にあるという主張を別にすれば、一つ目の志向と二つ目の志向が関係し合っただけで類相関の現象が現われているとする平山氏の考えは妥当ですね。この考えによって、A類反切にB類上字が用いられないことや、B類反切にA類上字が用いられないことも説明できます。それでは中心の課題である蒸職韻の音価推定について確認しましょう。

#### 蒸職韻の音価（唇音）

吉池：第二節に「蒸職韻は周氏によってB類-*iĕŋ*, -*iĕk* とされているが、三根谷体系では-*iaŋ*, -*ia<sup>h</sup>k*/の位置を占め、C類に入ることになってしまう。三根谷氏の音価はKarlgren氏の推定音-*iəŋ*, -*iək* に音韻論的解釈を施したものである。周氏の音価はKarlgren説に対するPaul Nagel氏の修正説を用いたものであり、この修正は、蒸職韻に軽唇音化の起らなかった点を説明するためになされたのである。」（44頁）とし、さらに「完本王韻の蒸職韻唇音反切六例の中、四例までがB類上字をとり、二例がC類上字をとる。したがって、蒸職韻唇音音節は反切上でB類の特性を有すると判断される。」（同44頁）とします。これにより蒸職韻唇音音節をB類とし韻母を-*ieŋ*, -*iek*/とします。いまその6例を挙げると次の通りです。平山氏は51頁の表5にこの6例を出しますが、いまは私なりのまとめ方で提示すると次のとおりです。

- 1 平声蒸韻 憑（扶氷）。扶は平声虞韻並母C類。
- 2 平声蒸韻 冰（筆陵）。筆は質韻幫母B類。
- 3 去声證韻 憑（皮孕）。王三は誤写で（火孕）とするが、王一は（皮孕）とする。  
王一によることができる。皮は平声支韻並母B類
- 4 入声職韻 逼（彼側）。彼は上声紙韻幫母B類
- 5 入声職韻 埴（芳逼）。芳は平声陽韻滂母C類
- 6 入声職韻 復（皮逼）。皮は平声支韻並母B類

中村：B類上字が4例ですね。表1によると、B類字が反切の上字となるのは、帰字（被切字）が重紐B類の時のみですから、これより蒸職韻の唇音音節は重紐B類であり、その主母音は前舌ということになります。もっとも、蒸職韻の唇音音節を重紐B類とし前舌主母音を設定する結論は周法高(1952)と同じです。

吉池：たしかに結論は同じです。しかし、重紐A類・B類に前舌主母音を、C類に中舌・奥舌主母音を設定するのは周法高(1948)<sup>5</sup>で既に行われており、周法高(1952)のいわゆる類相関の現象とは関係はありません。平山久雄(1966)の独自の所は、類相関の現象により帰字(被切字)をA・B類かそれともC類かを決定し主母音の音価の概略を定めるという新たな方法の発見にあります。これによって、後で見るように、唇音のない之韻の主母音も決定できることとなります。

中村：おそらく、蒸職韻の唇音音節の結論を牙喉音音節に応用したところ、異なる結論を得たというのが平山氏論文の発端なのでしょう。

吉池：そういうことかもしれませんね。ところで、類相関という現象が存在し、それによって問題としている音節がA類であるかB類であるか、あるいはC類であるかが分かる場合があることは理解しました。A・B類であればその主母音は前舌であり、C類であるならば中舌・奥舌です。類相関を音価推定の一助として利用することができるということですが、音価推定と声母の口蓋化の有無を結び付けた議論について、わたしは腑に落ちません。

中村：第二節の結びに「B類声母一般の音声的特徴は、その音韻環境、すなわち主母音が前舌母音で声母が/j/を含まないという条件の下で、はじめて生じたものである。ゆえに、蒸職韻唇音の主母音は/ʌ/ではなく/e/のはずであり、全体の韻形は/-ieŋ, -iek/(B類)でなければならないのである。」(45頁)とあります。蒸職韻唇音音節は重紐B類なのでその主母音は前舌である、とさえ言えばよい事であって、「声母が/j/を含まないという条件の下で、はじめて生じたものである。」は、重紐の別を声母口蓋化の有無とする説をとる平山氏の立場の表明にすぎません。先ほどから度々言っている事ではありますが、この部分を周氏のように前舌主母音の広狭の違いと見ても、有坂・河野氏のように介音の違いと見ても特段の不都合は生じません。

吉池：ここまでの平山氏の議論についての印象ですが、重紐の別が声母の口蓋化の有無の別であることを論証せずに議論を進めている、C類の声母の口蓋化の程度がA類とB類の間であることの意味を明確にしないで議論を進めている、この二点に問題を感じます。しかし、類相関の現象を利用して音価推定に利用しようとする点は理解できます。

中村：以上を要するに、唇音音節の反切上字にB類が使用されていれば、表1より見て、その帰字(被切字)はA類でもC類でも無く、B類であるということが言えるわけですね。

---

<sup>5</sup> 周法高(1948)「古音中的三等韻兼論古音的寫法」『中央研究院歴史語言研究所集刊』第19本、203-233頁。

## 牙喉音音節の場合

吉池：周氏は唇音音節に所謂“類相関”の現象があることを発見したわけですが、平山氏は第三節「牙喉音拗音における反切上字—帰字の類相関」で、牙喉音帰字（被切字）全体について、上字にA類とB類を用いる反切の一覧を「表2」として挙げます。それによるとA類上字を用いる帰字（被切字）はA類で、B類上字を用いる帰字（被切字）はB類です。ただし、A類・B類上字を用いる帰字（被切字）の中にC類は一つもありません（後の増加字と見なせる1字を除きます）。これに依って、表1と同様の相関が、唇音音節だけでなく、牙喉音音節に於いても認められることを明らかにします<sup>6</sup>。

中村：平山氏の「表2」をみると、いま問題としている蒸職韻牙喉音帰字（被切字）の例はありません。例が無いということは、蒸職韻牙喉音帰字（被切字）の上字は“全てC類”であるということです。そうであるならば、蒸職韻牙喉音帰字（被切字）はC類の可能性が高くなる。もっとも、上字がC類であることは偶然であり、帰字（被切字）がC類であるとは限らず、B類であるかもしれません。蒸職韻牙喉音音節の実例が幾つあり反切はどのようなか知りたいところです。

吉池：その点について平山氏は明示しないので、いま上田正(1975)<sup>7</sup>を利用して用例を挙げると次の通りです。なお、原本切韻として推定されない小韻であっても、完本王韻（王<sub>三</sub>）に有るものは挙げます。参考までに先に提示した6例の唇音も挙げます。

表2 蒸職韻唇音・牙喉音音節に付された反切

切韻の推定反切	切韻系韻書の反切
平声蒸韻	
唇音	
・憑蒸韻（扶虞韻並母C類氷）	（扶氷）切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> —王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 広
・氷蒸韻（筆質韻幫母B類陵）	（筆陵）王 <sub>一</sub> —王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 広。（筆凌）切 <sub>三</sub>
牙喉音	
・膺蒸韻開口（於魚韻影母合口C類陵）	（於陵）切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> —王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 広
・兢蒸韻開口（居魚韻見母合口C類陵）	（居陵）切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> —王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 広
・凝蒸韻開口（魚魚韻疑母合口C類陵）	（魚陵）切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> —王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 広
・興蒸韻開口（虛魚韻曉母合口C類陵）	（虛陵）切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> —王 <sub>二</sub> 王 <sub>三</sub> 広

<sup>6</sup> 牙喉音節を含む類相関の研究史については、平山久雄(1991)「中古漢語における重紐韻介音の音価について」『東洋文化研究所紀要』第111冊、8-9頁に詳しい。

<sup>7</sup> 上田正(1975)『切韻諸本反切総覧』(均社単刊第一) 京都大学・文学部中文研究室内均社。

- ・ 琬蒸韻開口（其之韻群母開口C類矜）（其矜）切<sub>三</sub>王<sub>一</sub>王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>広
- ・ 硯蒸韻開口（綺紙韻溪母開口B類琬）（綺琬）王<sub>一</sub>王<sub>三</sub>広。（綺陵）王<sub>二</sub>。（ナシ）切<sub>三</sub>

### 上声拯韻

#### 唇音

- ・ 無し

#### 牙喉音

- ・ 無し

### 去声證韻

#### 唇音

- ・ 憑證韻（皮平声支韻並母B類孕）（皮孕）王<sub>一</sub>。（火孕）王<sub>三</sub>。（皮餞）唐。  
（皮證）広。（ナシ）王<sub>二</sub>P3694 表

#### 牙喉音

- ・ 鷹證韻開口（於魚韻影母合口C類證）（於證）王<sub>一</sub>王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 P3694 表 広(應)
- ・ 興證韻開口（許語韻曉母合口C類鷹）（許鷹）P3694 表。（許應）王<sub>一</sub>王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐広

### 入声職韻

#### 唇音

- ・ 逼職韻（彼上声紙韻幫母B類側）（彼側）王<sub>三</sub>唐 S6013 P4746 広。（彼力）王<sub>二</sub>
- ・ 埴職韻（芳平声陽韻滂母C類逼）（芳逼）王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 S6013 P2014-9 広。（不逼）P4746
- ・ 復職韻（皮平声支韻並母B類逼）（皮逼）王<sub>三</sub>P2014-9。（符逼）王<sub>二</sub>S6013 広。  
（符逼）唐

#### 牙喉音

- ・ 絶職韻曉母開口（許語韻曉母合口C類力）（許力）王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 S6012,（許極）広
- ・ 極職韻群母開口（渠魚韻群母C類力）（渠力）王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 S6012 P4746 広
- ・ \*憶職韻影母開口（於魚韻影母合口C類力）（於力）王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 S6012 広
- ・ 韃職韻溪母開口（丘尤韻溪母開口C類力）（丘力）王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 S6012 広
- ・ 殛職韻見母開口（紀止韻見母開口C類力）（紀力）王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 広
- ・ \*抑職韻影母開口（於魚韻影母合口C類棘）（於棘）王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>唐 S6013 P2014-9
- ・ 寢職韻疑母開口（魚魚韻疑母合口C類抑）（魚抑）王<sub>二</sub>S6013。（魚力）王<sub>三</sub>唐 P2014-9 広

中村：牙喉音の15例の中14例がC類で、1例がB類です。B類の1例は切<sub>三</sub>に無いので原本切韻に無かった後代の増加字と見なすならば14例全てがC類ということになります。それに対して唇音は6例中4例がB類で2例がC類です。



吉池：私はこれで蒸職韻牙喉音開口音節はC類だと見ていいのではないかと思うのですが、平山氏は慎重を期して、第四節「蒸職韻の音価（唇音以外）」で確認の作業をし、その結果、蒸職韻牙喉音音節は一部を除きC類であったと結論します。

中村：それでは次に、その第四節の平山氏の議論を見てみましょう。

### 蒸職韻の音価（唇音以外）

吉池：平山氏の「表2」（上字にA類・B類字を使用する全牙喉音音節の一覧表）に、蒸職韻牙喉音開口の帰字（被切字）は挙がらないので、上字はA類・B類字ではなくC類字を使用していると判断することができます。我々もそのことを前出の本稿の表2で確認しました。14例全てがC類でした。しかし平山氏はこれをもって直ちに蒸職韻牙喉音開口をC類とはしません。「四、一 牙喉音開口」に於いて、蒸職韻牙喉音開口字を反切上字とする帰字（被切字）にどのようなものが有るかを確認します。下記の5例を挙げ、そのうち有効な3例中の2例の帰字（被切字）がC類であることから、平山氏の「表2」で、上字にA類・B類字が使用されないのは偶然ではなくC類であるとし、次に問題の5例を挙げると次の通りです。いま上田正(1975)により韻書の情報を付します。（ ）内は反切。

帰字（被切字）	反切上字 下字	韻書の情報
(1) 禰支韻上声開口B類	(興蒸韻去声曉母 倚)	(興倚)王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> 広。切 <sub>三</sub> に当該字無し
(2) 睇欣韻上声開口C類	(興蒸韻去声曉母 近)	(興近)王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> 。切 <sub>一</sub> 切 <sub>三</sub> に当該字無し
(3) 紆虞韻平声合口C類	(憶職韻入声影母 俱)	(憶俱)切 <sub>三</sub> 王 <sub>三</sub> 広。(於于)P2014-2
(4) 奄鹽韻上声B類	(應蒸韻平声影母 儉)	(應儉)切 <sub>三</sub> 王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> 。(衣儉)広
(5) 掩嚴韻上声C類	(應蒸韻平声影母 广)	(於广)広、(虞广)王 <sub>一</sub> 王 <sub>三</sub> 。(應儉)王 <sub>一</sub>

中村：平山氏は、5例中(1)(2)は原本切韻に無い増加字として除き、有効なものは(3)(4)(5)の3例とし、(5)については注28で「(5)の上字を広韻は「於」に作るが「王一」「王二」は「應」に作る（王一および完本王韻がもと「虞」に作るのは「應」の誤りとして校訂される）。」とします。3例中の(3)(5)の2例がC類帰字（被切字）の上字に使用されることより、「蒸職韻牙喉音開口がC類であったのは明らかといってよい。牙喉音の場合、A類上字・B類上字がC類反切に使われた例は増加反切以外まったくないのであるから、僅か二例であつてもそれらの存在は重視すべきである。」(48頁)とするわけです。

吉池：類相関からみて、(3)(5)はC類帰字（被切字）なので、その上字にはA類・B類ではなくC類が来ます。それに対して(4)はB類帰字（被切字）なので、その上字はB類あるいはC類が来ます。この三例を同時に説明し得るのは、上字すなわち蒸職韻牙喉音開口字をC

類とした場合です。上字をB類としたならば(3)と(5)が類相関としての説明ができないこととなります。

中村：ところで三例の内、(5)俺は嚴韻上声すなわち廣韻です。上田正(1975)は、この韻が切<sub>三</sub>やP3696-2に無いことより、原本切韻の韻字とはしません。また、王<sub>一</sub>王<sub>三</sub>の(虞<sub>廣</sub>)は上田氏が指摘するように誤写ですが、それを平山氏のように——おそらく王<sub>一</sub>の(應<sub>險</sub>)によるのでしょうか——(應<sub>廣</sub>)に校訂して良いものかどうか不安があります。不安なく使えるのは、(3)C類と(4)B類の二例です。このような僅かな例をどのように扱うか、意見が分かれるところでしょう。

吉池：意見が分かれるとは具体的にどのようなことでしょうか。

中村：上田正(1975)の判断は、平山氏とは異なり蒸職韻牙喉音をB類とします。上田氏は「また平山久雄氏「切韻における蒸職韻と之韻の音価」(東洋学報 49-1)「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」(東洋学報 55-2)は私案と異なるので参看されたい。」(218頁注4)との注記を付して判断の異なることを明示します。

吉池：上田氏は、平山久雄(1966)の類相関の議論を参照した上でB類とするわけですね。

中村：少なくとも上田正(1975)は、平山久雄(1966)をふまえた上での“私案”ですから、類相関によってC類とする見解には賛成できなかったのでしょうか。その点について確認しておきたいのは先に挙げた本稿の表2です。職韻牙喉音の韻字に憶職韻影母開口(於魚韻影母合口C類力)と抑職韻影母開口(於魚韻影母合口C類棘)があり、この二つの音節は影母の下で対立をしているように見えます。前者は王<sub>一</sub>王<sub>三</sub>唐 S6012 広にあり、後者は王<sub>一</sub>王<sub>三</sub>唐 S6013 P2014-9にあるので原本切韻にもあったと仮定して問題はなさそうです。上田氏はこの憶小韻に次の注記を付します。注4「広韻以外の諸本は抑小韻と対立するので姑く憶A抑Bとする。韻鏡、七音略の三等に置くのは憶抑を併す広韻と同じ考えかたである。」、抑については注7で「広韻は憶小韻に併す。」(いずれも218頁)とし、憶1字をA類とし、その他の職韻牙喉音字を全てB類とします。あるいは、職韻におけるこの処置を蒸職韻全体に押し広げたのかもしれない。<sup>8</sup>

吉池：反切のみでの判断が困難なものは、体系など全体を見渡して無理のないものを選択する、ということでしょうかね。

---

<sup>8</sup> 平山久雄(1972)「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」『東洋学報』55-2。では、憶C抑Bとする案を提出している。

中村：平山氏は「五 蒸職韻音価のまとめ」で次の表を掲げます。正歯音二等と舌歯音(除正歯音二等)については、類相関と直接には関わらないので検討から除きます。問題は、牙喉音の開口をC類とし、合口をB類とする点です。

表 3

開 合	開	合
声 母		
唇 音【B類】	<b>/-ieŋ, -iek/</b>	\
正 歯 音 二 等		
舌歯音(除正歯音二等)	<b>/-iɿŋ, -iɿk/</b>	
牙喉音【開口C類 合口B類】		<b>/-iuek/</b>

【】は対談者が付したものです。

吉池：職韻牙喉音合口をB類とすることについては、「四、二 牙喉音合口」において、「蒸韻には合口がなく、職韻は牙喉音の曉・匣両母の下でのみ合口がある。職韻牙喉音合口字が反切上字として使われた用例はないが、職韻合口匣母反切にB類上字「榮」があらわれることにより、職韻合口牙喉音はB類であつたのが知られる。」(49頁)とあります。

いま例字を挙げると次の通りです。

帰字(被切字) 諸韻書の反切の情報  
 域職韻入声合口匣(于)母 (榮庚韻平声合口匣(于)母B類 逼) 王二唐 S6013。(榮〔 〕) 王三。  
 (雨逼) 広。

中村：確かに職韻合口牙喉音の帰字(被切字)の上字にB類が使われるので類相関によるならば帰字(被切字)はB類です。上記表3自体に矛盾はありません。もっとも、次の表4のように牙喉音開口をB類とすることも可能です。これは上田正(1975)の言う私案とおなじです。(舌歯音を含めて全体を/-ieŋ, -iek/とするも可)

表 4

開 合	開	合
声 母		
唇 音【B類】	<b>/-ieŋ, -iek/</b>	\
正 歯 音 二 等		
舌歯音(除正歯音二等)	/-iɿŋ, -iɿk/	
牙喉音【開口合口共にB類】	<b>/-ieŋ, -iek/</b>	<b>/-iuek/</b>

吉池：蒸職韻の牙喉音開口をB類とすると、蒸職韻の唇牙喉音としてのまとまりが有り、なによりも複雑にならない。このようにして不都合が無いのでしょうか。

中村：唯一の不都合は職韻の字がC類被切字に対する反切上字として使われる例があることでしょう。前に出たものですが、再度示すと次のものです。

(3) 紆虞韻平声合口C類 (憶職韻入声影母 俱) (憶俱)切<sub>三</sub>王<sub>三</sub>広。(於于)P2014-2

(5) 掩嚴韻上声C類 (應蒸韻平声影母 广) (於广)広、(虞广)王<sub>二</sub>王<sub>三</sub>。(應險)王<sub>二</sub>

このうち(5)が例としてやや不安のあることはすでに述べました。(3)の反切上字「憶」は上田氏が暫定的にA類とするものですが、C類反切に用いられているので類相関の例外となります。

吉池：いずれにしても、反切上字と帰字(被切字)の類相関を音価の推定に利用することができるという平山氏の議論は理解できます。A・B類と判断できるならばその主母音は前舌的であり、C類と判断できるならばその主母音は中舌的もしくは奥舌的であったと推定することができる。問題は判断する用例が少ない場合です。上に挙げた蒸職韻の牙喉音開口の場合がそれに当たるかどうか人により判断が異なるかもしれません。平山氏はC類と判断し、上田氏はB類と判断します。このような場合、全体の様子を慎重に比較して、どちらが相応しいかを定めるということになるのでしょうか。この点については「七 敦煌毛詩音反切よりみた蒸職韻と之韻の音価」のところで再度議論しましょう。

中村：次に「六 之韻の音価」を検討ですね。之韻は、先の蒸職韻牙喉音開口とは異なり、反切の面からC類と判断し得る例が多いので問題は無いでしょう。

### 之韻の音価

吉池：平山氏によると「之韻牙喉音反切【唇音は無い：対談者】は、すべてC類上字をとっている。反切上字としての之韻牙喉音字は、次表に見られるようにA・B・C各類の反切に用いられる。これらより見て、之韻牙喉音がC類に属したのは明らかである。」(53頁)とあります。問題の之韻牙喉音字を、反切上字に使用する27例中、A類帰字(被切字)は4例、B類帰字(被切字)は6例、C類帰字(被切字)は17例です。

中村：類相関より判断するならば之韻牙喉音字はC類とすることになりますね。

吉池：「之韻牙喉音がC類であつたと知ることにより、之韻が音韻論的に奥舌主母音を含むものとして、脂韻開口とは異なる音価を有したことが確定されるのである。」(54頁)とします。類相関を利用して之韻牙喉音をC類する手法は明瞭です。

中村：之韻に奥舌主母音を含むどの様な韻形を想定するかは、また別の問題です。平山氏は之韻開口を/-iΛw/[-iǎɪ]とし、微韻開口を/-iΛi/[-iǎi]とし、重紐韻の脂韻開口を/-iei/[-i]とします。

#### 敦煌毛詩音反切と切韻反切の蒸職韻と之韻

吉池：「七 敦煌毛詩音反切よりみた蒸職韻と之韻の音価」の記述によると、敦煌発見の毛詩音残巻の反切が示す音韻体系は、切韻と慧琳音義の中間を表わすようで、その反切は上字一帰字（被切字）の類相関というよりも、“類一致”となっているようです。「A類反切にはA類上字、B類反切にはB類上字、C類反切にはC類上字が、それぞれ原則として使われており、少数の例外的反切を除き、A類反切・B類反切にC類上字は使われないのである。」（57頁）とあります。

中村：先に、切韻の蒸韻開口牙喉音字の反切上字を見たわけですが、C類字が使用されているけれども、それは偶然かもしれない、蒸韻開口牙喉音字を反切上字で使用している他の韻字の調査が必要でした。しかし例字が少なく不安を覚えるものでした。敦煌毛詩音反切で“類一致”が原則であるとするならば、蒸韻開口牙喉音字の反切上字がB類であれば帰字（被切字）もB類、反切上字がC類であれば帰字（被切字）もC類と惑うことなく判断できるということですね。

吉池：そうなのですが「敦煌毛詩音反切では、蒸職韻牙喉音開口反切にB類上字を用いたものと、C類上字を用いたものがあり、面白いことにこれらは反切下字においても区別がある。すなわち、B類上字を用いた反切では唇音字や正齒音二等字が下字となっており、C類上字を用いた反切では来母字が下字となっている。したがって、蒸職韻牙喉音開口には/-ieŋ, -iek/と、/-iΛŋ, iΛk/両様の韻母があらわれるようになっていた、と推定される。」（57頁）とあり、細かいデータは省略するが専論の「音注総表」を参照されたいとします。

中村：専論の「音注総表」を参照されたいとのことですが、少なくとも、蒸職韻牙喉音開口の上字をB類とする反切数とC類とする反切数についてはいま確認したいです。

吉池：専論は平山久雄(1966a)<sup>9</sup>です。毛詩音残巻は複数種ありますが「音注総表」はそのうちS. 2729のみによるものです。後の平山久雄(2018)<sup>10</sup>には「我們將S、P、P【SはS. 2729とDX-1366a、PはP. 3383、PはP. 2669V：対談者】裡的蒸韻反切全部録出，列爲表3-10。」（75頁）とあるので、平山久雄(2018)の「表3-10 蒸韻反切表」（76頁）を確認することに

<sup>9</sup> 平山久雄(1966a)「敦煌毛詩音残巻の研究」『北海道大学文学部紀要』XIV-III。

<sup>10</sup> 平山久雄(2018)『敦煌《毛詩音》音韻研究』好文出版。

します。牙喉音開口の反切上字にB類を使用するもの平声蒸韻2例、入声職韻2例、合計4例。牙喉音開口の反切上字にC類を使用するもの入声職韻5例となっています。

中村：入声職韻にはB類とC類があるということですね。蒸韻はB類だけということでしょうか。

吉池：その点については、「蒸韻舒聲沒有C<sub>1</sub>類反切，但有C<sub>1</sub>類上字，可以證明情況當與入聲平行：在表3-8中，蒸韻上字用在C<sub>1</sub>類反切的共有6種（7次），」（77頁）とし、「表3-10 蒸韻反切表」には上字をC類とする蒸韻は無いけれども、反切上字を蒸韻とするC類帰字（被切字）が6種（7次）ある。これによりC類と判断するとのこと。

中村：そうすると、毛詩音残巻の蒸職韻牙喉音開口にはB類字とC類字の両者が含まれることとなります。そのことと、原本切韻の蒸職韻牙喉音開口とがどのように関連するか問題となります。平山久雄(1966)の考えを確認しておきましょう。

吉池：平山氏は「したがって、【毛詩音残巻の】蒸職韻牙喉音開口には/-ieŋ, -iek/と、/-iɒŋ, iɒk/両様の韻母があらわれるようになっていた、と推定される。両者の分布についての音韻的条件は見出されず、同じ声母の下に両様の反切があらわれることもある。両者の併存は/-iɒŋ, iɒk/ > /-ieŋ, -iek/への一種の過渡的状況【注がある】の反映と解される。慧琳音義の音韻体系ではC類韻母の多くがB類韻母に合流しているが、対立するB類韻母のない蒸職韻牙喉音開口において、この方向の変化がはやくから起つたのであろう。」（57頁）とします。

中村：C類とB類の分化の音韻的条件が見出されないわけですから、切韻の段階で蒸職韻牙喉音開口がC類/-iɒŋ, iɒk/であったものが、毛詩音残巻の段階でC類/-ieŋ, -iek/の一部がB類/-ieŋ, -iek/となり、C類とB類が混合した状態となったという単純な音韻変化ではなさそうです。

吉池：その点について、平山氏は「過渡的状況」という言葉に対する注42において、「「過渡的状況」とは、一方内における両語形の併存または自由な交替、或は、教養的発音と俗語的発音による違い、などを含むが、事実がその何れであつたかは知りたい。或はまた、敦煌毛詩音の反切じたいに新旧の二層があるのかもしれない。」（67頁）とします。

中村：平山氏は、毛詩音残巻を、切韻の蒸職韻牙喉音開口がC類であることを証する資料と見ているようですが、上の注記によると、直ちに原本切韻の蒸職韻牙喉音開口がC類/-iɒŋ, iɒk/であったとするには不安があります。

### 上古音との対応よりみた蒸職韻の音価

吉池：平山久雄(1966)は「蒸職韻の音価の中、唇音および牙喉音合口の場合については。主母音を/e/とする推定の妥当さが上古音との対応からも傍証される。」(58頁)とします。

中村：蒸職韻の唇音がB類であり、職韻(蒸韻に合口は無い)の牙喉音合口もB類であり、その主母音に前舌主母音が想定される部分については問題の少ないところです。問題は蒸職韻の牙喉音開口の部分です。反切の用例は見方によっては微妙です。平山久雄(1966)はC類とし中舌・奥舌の主母音としますが、上田正(1975)はB類とします。

吉池：その点について「左記以外の場合の蒸職韻の音価については、主母音に/e//Λ/のいずれを擬するのがより妥当であるのか、上古音との対応からは右述の如き明瞭な答を引き出すことがむずかしい。」とし、蒸職韻の牙喉音開口については上古音から情報を得られないとします。

中村：平山久雄(1966)の最大の焦点は、思うに、蒸職韻の牙喉音開口を類相関によってC類とし、蒸職韻の唇音と職韻牙喉音合口のB類とは異なる主母音を想定するところです。その焦点について、反切においても、毛詩音残巻との対応においても、上古音との対応においても、不安を覚えるものとなっていると言わざるをえません。そうであるならば、蒸職韻の唇音と牙喉音のすべてをB類とし体系の複雑さをさけるというのも一つのあり方ではないでしょうか。

吉池：特段の不都合がないのでしたら、蒸職韻の唇音と牙喉音のすべてをB類したほうが、たしかに複雑でないのですが、蒸職韻牙喉音音節の上字14例すべてがC類であることが気になります。これが偶然なのか、それとも偶然ではないのか、私としてはいまのところ判断する基準を持ち合わせず、判断する事は困難だと言うしかありません。

切韻系韻書の反切を見ると、上字と下字の選択の仕方には様々なものがあります。その点、毛詩音残巻のように原則として“類一致”となるものとは異なります。そのような切韻系韻書の反切から得られる類相関の情報によって、AB類なのかそれともC類なのかを決定し得るものかどうか不安があります。音価推定において“参考にする”ということであれば価値のある情報だと思いますがいかがでしょう。

中村：“上字と下字の選択の仕方には様々なものがある”とのことですが、平山氏は反切上字選択において二つの志向の存在を指摘しました。「帰字の音韻的条件に関わりなく少数の一定の上字を選択する志向」と「帰字と音韻的構成が一致するよう上字を選ぶことによって

反切を唱え易くする志向」です。C類上字を選ぶのは前者によるもので、A類及びB類上字を選ぶのは後者によるものとのことでしたね。

吉池：いうまでもないことかも知れませんが、C類上字には、C類帰字と音韻的構成が一致するよう選ばれたものと、帰字の音韻的条件に関わりなく少数の一定の上字として選ばれたものの二種類があるはずで

中村：いずれにしても、帰字と音韻的構成が一致するよう上字を選ぶことはいわゆる慧琳型反切（＝「紐声反音」「異調同音上字式反切」）の一種で、そのような反切選択法の流行がくり返し起こったのでしょう。比較的後代の反切選択の法かもしれません。わたしは、類相関の現象は法則のようなものではなく、反切用字法上の一つの傾向と見ています。このような傾向によって音価を決定することについては、慎重であらねばならないとも思っています。先ほど、蒸職韻牙喉音音節の上字 14 例すべてがC類であるという話が出ましたが、実は牙喉音においては被切字がA・B・C類のいずれであろうと、反切上字にC類を用いるものが圧倒的に多いのです。平山氏のいう「帰字の音韻的条件に関わりなく少数の一定の上字を選択する志向」が牙喉音では顕著だと言えるでしょう。私が以前作成した簡単な統計がありますので、ここで紹介しておきます。反切上字がA・B類であるかC類であるかを声調ごとに集計したものです<sup>11</sup>。

表 5

上字 \ 声調	平声	上声	去声	入声
A・B類（唇音）	6	13	26	8
A・B類（牙喉音）	0	3	13	4
C類	88	61	43	34

特に際立っているのは平声で、牙喉音では反切上字がすべてC類です。つまり類相関は平声においてはほとんど見出されないということになります。周法高(1952)が唇音のみを対象としたのは賢明な方法だったと言えるかも知れません。いずれにせよ、類相関は音価推定にある程度有用ではあるが、あくまでも傾向を示すものなので、過信すべきものではないということです。

#### おわりに：音韻観の違いについて

<sup>11</sup> 統計の対象としたのは、「支・脂・祭、真、仙、宵、侵、塩」および相配する韻で、幽・庚・清・蒸は対象としていない。また喉音は影母・曉母のみで喻母・匣母は対象としていない。



吉池：私は、声母の口蓋化をめぐる平山氏の議論の進め方がよく理解できません。おそらく音韻についての考え方——音韻観——が異なるためでしょう。

中村：どういうことですか。

吉池：たとえば平山久雄(1977)<sup>12</sup>は7頁で、宵韻平声幫母のA類「飈」とB類「鏹」の音韻を/pjiau/と/piau/の対立とし、その音声を[pjɛu]と[pɪæu]とします。音声は事実を表現しようとしたもので、声母と介音と主母音は互いに影響し合っており、このように表記することについて、ひとまずは理解することができます。問題は音韻の方です。これが何を表わそうとしているのか、ここにその人の音韻観が現れます。平山氏は体系をもっとも理に適って表現するものを音韻論的解釈とするようです。そして音声の[pjɛu]と[pɪæu]が反切に反映するとして反切を分析します。ですが、[pjɛu]と[pɪæu]は、中古漢語を聞き分け、そして話し分けるネイティブの感覚ではなく——仮に中古漢語よりも詳しく音を分ける外国人がいたとして——その外国人の感覚です。ですから、それによって反切を説明するのは不可であろうと思います。しかし、私には平山氏がそれをやろうとしているように見えるのです。

中村：たしかにネイティブにはネイティブ特有の音を聞き分け話し分ける習慣があったことでしょう。その習慣によったならば、必要以上に音を細かく分析することなどはしない。吉池さんは、ネイティブの持つ音の習慣の総体を音韻と考えるということですね。有坂秀世のいわゆる“音韻観念”がそれに当たるかもしれません。“音韻観念”による議論は、当時もそして現在も不評のようですが、歴史的な音韻論を展開する場合には必要な考え方でしょう。私も反切に反映するものは音声そのものではなく、ネイティブの音韻観念だろうと思います。

吉池：中古漢語のネイティブが、声母の口蓋化の有無によって音を区別する習慣をもっていたならば音韻は/pjiau/と/piau/であり、介音と主母音の違いは音声として有ってもさほど重要ではない。あるいは聞き取れなかったかもしれない。介音の違いによって音を区別する習慣をもっていたならば音韻は/piau/と/pɪau/であり、声母と主母音の違いは音声として有っても聞き取れなかったかもしれない。主母音の違いによって音を区別する習慣をもっていたならば音韻は/piɛu/と/piæu/であり、声母と介音の違いは音声として有っても聞き取れなかったかもしれない。

---

<sup>12</sup> 平山久雄(1977)「中古音重紐の音声的表現と声調との関係」『東京大学東洋文化研究所紀要』73の7頁参照。

中村：吉池さんはそのようなネイティブの音の習慣を、反切や分韻などを参考にして仮定したものを音韻とすると言いたいのですね。そうであるならば、たしかに音韻観そのものが異なるため、残念なことではありますが、対話は成り立たないのでしょう。

吉池：重紐についての議論は(1)～(8)と思いのほか長いものとなりましたが、この辺りで締め括りたいと思います。